



小牧山

戦国に馳せる

小牧市文化財保護審議会委員

入谷 哲夫

第24回 小牧山のむかしむかし

2年間の連載『小牧山 戦国に馳せる』の舞台で、織田信長が城を築いた小牧山、ここには数々の伝説、民話が伝わっています。

小牧山の別名

『信長公記』では小真木山と記された小牧山には、いろいろな別名があります。

帆巻山 古代、船津村まで二面海で、渡ってきた舟人が小牧山を見ると帆を巻いたから（『小牧山旧記』）。

駒来山 鶴沼宿で開かれていた駒市を小牧宿へ引馬して小牧で開くことにしたから（『異本小牧山旧記』）。

曳馬山 里老の話にむかし馬市があったから（『尾張地名考』）。

飛車山（『張洲府志』）。

小巻山（『小牧山旧記』）。

小牧山の七つ石と観音洞

「七つ石」は、明応元年（1492）狩の名人が小牧山で、一列に並んだ鹿の群れを射ると七匹に命中し、轟音と共に七つの石になりました。その中央に現れた千手観音を祭つたのが間々観音の始まりで、七つ石の位置は今の観音洞です。今、石が七つないのは名古屋城の石垣として持つていかれたからだそうです（『間々観音寺沿革書』・『正事記』）。

小牧山の世間話など

三足隠れ 小牧山を見ながら東南麓

までやってくると、突然小牧山がまったく見えなくなり、二歩も歩くとまた見えてくるようになる不思議な場所のことです（『正事記』）。

乳観音 行商で暮らしをたてていた夫婦に突然夫の死という不幸が襲います。妻はショックで乳が全く出なくなり、生まれたばかりの赤ん坊は泣き喚くばかり。村の老人が自分のお米を分け与えると、母親はそのお米を全部小牧山の観音様に供えて、死後の安楽を祈りました。家に帰り、泣き喚く子どもを抱いて死のうとする

と、急に乳房がはつてきて、乳があふれ出たそう、間々観音が乳観音として有名になったのは、それ以来のことです（『間々観音寺沿革書』）。

小牧山のカササギ 尾張藩が山にカササギを放つたのは、元禄7年（1694）4月のことでした。尾が長く背と腹が碧色の美しい鳥でした。しかし、鳥ですから自由に飛び回り、百姓たちは役人から言いつけられた通りカササギを追いかけて、山から逃げるに捕らえてまた山に放ちました。

この鳥がふえると国が栄えるといわれていたので、放たれたものです（『鸚鵡籠中記』）。

小牧山の狐 麓の間々村に名譽の狐と讃えられた狐が住んでいました。

「石を投げよ」というと石を投げ、「踊れ」というと踊りました。それに力持ちで、大きな石を投げたり持ち上げたそうです。麓の家に現れ、

家財道具の上に乗ったり降りたりして戯れることが好きな狐で、村の人氣者でした。ある時、この狐に紙と筆を渡して「何か書け」といった村人がおり、しばらくしかめつ面していた狐は、やがて紙に何やらぬたくりました。見ると絵とも字とも分からぬものでした。まもなく狐は姿を消したそうです（『正事記』）。

吉五郎狐については、昭和初期、郷土史家の津田応助氏が『老狐小牧山吉五郎』を書きましたがこれは創作です。ただ序文に鷹木村（春日井市）の旧家に伝わる『老狐山吉譚』、江崎家で見つかった『旧本陣記録』の記憶と自分が聞いた話を参考にしたと記しています。前記二書は、所在不明で見ることができず省きました。

※原話に近いものを重視する立場から、明治以前の文献が残る昔話だけを集めてみました。

▲観音洞



▲観音洞

平成20年4月15日号から連載してきました「小牧山戦国に馳せる」は今回を持って終了します。ご愛読ありがとうございました。

問合せ 文化振興課 ☎76-1189